

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	野間宏「顔の中の赤い月」論—国家＝軍が掲げる《法》の権威
Author(s)	尾西, 康充
Citation	国文学攷, 245 : 1 - 12
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049732
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	



野間宏「顔の中の赤い月」論—国家Ⅱ軍が掲げる《法》の権威

尾 西 康 充

1

マルクス経済哲学者・梯明秀は、一九三八年六月京都人民戦線事件に際して、雑誌「世界文化」の関係者として治安維持法違反の容疑で検挙される。未決監の獄中で転向し、一九四〇年八月懲役二年（執行猶予四年）の判決を受け、同年一月国策会社である北支那開発株式会社調査局東京支局に就職した。

梯は、ファシズムの攻勢に対して唯物論の立場を守り抜こうとしたものの、追いつめられて認めた転向と戦争協力の姿勢に、みずから「絶対有の立場」という哲学的名称を与えた。「絶対有の立場」とは、西田哲学の有即無の「絶対無の立場」を唯物論化し、「かゝる現実的矛盾に追ひこまれて自らすゝんで自己を無にして対立的有に自己否定的に即する」という知識人の態度のことであった。¹⁾

要するにそれは、ファシズムを外部から悟性主義的に批判

するのでなく、その機構の只中に身を置いて逆にその理性となり、現実的矛盾を内部からファシズムの伸展とともに解決せんとする立場である。²⁾

梯によれば、「絶対有の立場」をとる知識人の態度とは、「インテリゲンチヤの合法場面における一般的な実存」のことである。その当時「社会政策字の領域において風早八十二氏が提唱してゐた由である「第三の途」なるものに、わたくしの絶対有の立場が一致してゐた」とする。³⁾ 風早は、総力戦体制下で戦争を遂行して生産力を拡大するには、政府による統制を認めつつも、一定の合理性を持った労働条件の完備が不可欠であるという生産力理論を唱えた。日中戦争勃発後の知識人に向かって、ファシズム体制内の構成分子に転化するでもなく、沈黙を守って時局に拱手傍観するでもない、「国民の批判的要素としてのその独自の積極的役割」を担って新たな社会変革をもたらそうと呼びかけたのである。⁴⁾

野間宏の「暗い絵」（一九四六年四、八、一〇月）は、漸進的組合主義でも急進的前衛党主義でもない、知識人学生にとって当面の状況に応じた現実的な路線である《第三の途》を模索しようと試みるところに作品の基本モチーフがおかれている。《第三の途》を引き受けようとする深見進介は、学生共済会を拠点に活動する小泉清や谷口順次、赤松三男たちの合法主義者たちから「共同の敵」のように思われていた。その一方、「日支の衝突を日本の支配階級の最後の危機」と判断し、『プロレタリア革命への転化の傾向を持つブルジョア民主主義革命』が二年以内に到来すると予測している永杉英作や羽山純一、木山省吾たちの非合法主義者たちに共感しながらも、それを「仕方のない正しさ」と感じていた。深見は彼らのような「仕方のない正しさ」ではなく、「仕方のない正しさをもう一度真直ぐに、ちゃんと直さなければならぬのだ」と考えていたのである。彼らは誰かがやらなければならないのだ」と考えていたのである。彼らは検挙されて獄死してしまうのに対して、深見は三年余りの外地での戦闘を終えて、内地に帰還して原隊に復帰してから検挙される。その後「転向して出獄し、生活費を得るため軍需工場に務めた」。このような経歴は野間自身と重なるのだが、これが梯のいう「自己の無において虚無の世界を企投するハイデッガー的実存でなくして、自己の非有において現実の時局の理性となる」態度であったとされる。³⁶

野間の「顔の中の赤い月」（『綜合文化』創刊号、一九四七年八月）は、過酷な戦場の光景をフラッシュバックさせて苦しむ主人公北山年夫を描き出した。戦友を見殺しにしてしまったという深刻なトラウマは、彼を「仕方のない正しさ」さえ望めない絶望に突き落としたのであった。つぎに「顔の中の赤い月」を取りあげて、野間の戦後小説の特徴を検討してみよう。

2

北山年夫は敗戦後、六年間の兵役を終えて南方から復員した。東京駅近くにある友人の会社に務めている。結婚三年目に夫を戦死させた堀川倉子の「一種苦しい表情」は、彼に「人間否定の声を上げさせる過去の戦場の思い出」をよみがえらせる。というのは、彼女の表情を見ると、「堀川倉子の姿に照応するような一人の苦しげな女の姿」を胸に抱いて戦場を歩き続けた「みじめな自分の兵隊姿」を想起するからであった。

北山にとって最初の恋人は、「情熱の激越な青年時代」にありがちな、彼にとって相手を過度に理想化して「祭壇にまつり上げる」対象であった。だが彼女は、彼の生活能力に不安を感じて別離を切り出した。二番目の恋人は、彼が務めていた軍需会社の事務員であった。北山にとって彼女は「心の底からどうしても愛することのできない女」でしかなく、「彼が失った恋人の代理の恋人」という存在

であった。彼が応召して内地の営舎にいるとき、彼女の死が知らされた。「毛布の中でパン菓子をかじりながら涙にぬれて、訓練と私刑に固く結びつけられた兵隊の日々の生活」を送る間、彼のような「三十をすぎた男」が「ただ愛のみが価値のあるものである」との信念を深めたのであった。北山は「編上靴へじょうぶつの底でなぐられて紫色に変色し、はれ上った頬を自分の冷たい手でなでながら、母親の柔かい手を思い、死んだ恋人の優しい掌てのひらを思った」。野戦に出撃して「極度に神経の緊張を強いる白兵戦闘の合間」、自分を本当に愛してくれた人間は「彼の母親と彼の死んだ恋人以外にはない」と痛感させられた。だが北山は、空襲で焼死した母親の愛すら「怪しい」と感じ、二番目の恋人をかけがえのない存在と確信するのであった。

北山は、夫を喪った堀川倉子に同情を寄せるのだが、彼女の「その苦しみにふれることができはしない」とし、「俺は俺の苦しみをだけを知っているだけで俺の苦しみを大事にもっているだけで……ただそれだけで……」と感じている。戦争によって犠牲を強いられた人間同士が苦しみを共有し、新たな人生とともに踏み出せば理想的なのだが、北山にはそれが不可能のように思えるのであった。

作品の最後の印象的な場面では、北山と堀川が乗った中央線の電車電車が四ツ谷駅に近づくと、北山は、彼女の「白い顔」の隅に「小さな斑点」があるのに気づき、「彼の心は奇妙にその斑点のために乱れ始めた」。だが彼の心を乱したのは、彼女の顔の隅にある「斑点」に触発され

て知覚された、自己の胸の片隅にある「斑点」であった。彼が彼女の「斑点」をみつめていると、胸中の「斑点」が不意に大きくなってきた。彼の「斑点」が彼女の「斑点」に投射され、その面積が広がって「赤い大きな円いもの」が彼女の顔のなかに現れてきた。「赤い大きな円い熱帯の月が、彼女の顔の中に昇ってきた。熱病を病んだのは黄色い兵隊達の顔が見えてきた。そして遠くのび、列をみだした部隊の姿が浮かんできた」。南方戦線フィリッピンでの小休止のない急行軍で、中川二等兵が隊列から脱落した。馬の手綱を離して膝を折って動かなくなった中川二等兵に、北山は何もしてやることができなかつた。北山の脳裡には、「ただ自分の生命を救うために戦友を見殺しにした」という、それまで抑圧されていた外傷体験の記憶が回帰してきたのである。

中央線の電車が音を立ててトンネルを離れる。北山は「仕方がない。仕方がないじゃないか。俺は俺の生存を守るために中川を見殺しにしたのだ。俺の生存のために。しかし、それ以外に人間の生き方はないではないか」という「自分の体の底の方からわき上ってくる暗い思い」に堪えることしかできなかった。「暗い絵」に描かれた「仕方がない正しさ」に通じる絶望であるが、深見が「仕方のない正しさ」を直そうとして《第三の途》を模索したのに比べて、北山は自分が「他の人間の生存を見殺しにする人間」であることに打ちひしがれ、「俺はこのひとの生存の中にはいることはできはしな

い。俺は俺の生存の中にしかないのだ」と孤立感を深める。結局この後、堀川はひとりで電車から降りてゆくことになったのである。

眼の前の現実に向き合えない北山は、敗戦後の日常風景のなかに戦場の光景が、兵役に就くと応召前の生活が、二番目の恋人と付き合いはじめると最初の恋人の姿がよみがえってくる。精神分析学の視点からいえば、「抑圧されたものが心のなかへ回帰する」性向を持つ人間は、自分が「存在する、あるいは存在し続けようとするためには、意識し考える主体——自我——であることが必要であり、自分の思考や欲望のある部分に気づかない分割された主体であってはならない」とされる。彼は自分を「自分自身の運命の主人」であると感じ、「意識的な考える主体としての自分を一秒たりとも消失させない」ことから、他者の存在も他者の欲望も認めようとしなくなる。もしそれが男性の場合、彼は「目の前の女性を無効」にしなから欲望の原因となるものに固着し続けるのだが、つねに「獲得することのできない何かを欲望」するために「彼の欲望の実現は構造的に不可能である」とされる。

北山の場合、堀川その人よりも、彼女の「苦しい表情」や「斑点」——「ほとんどあるかなきを判定することさえ困難なほどの、かすかな小さな点」——にとらわれている。このとき彼女の特徴は、彼女を眼差しながら彼女の視点に立って過去の自己をとらえ直すこととする北山の欲望の原因になっている。へわたし」は他者の眼差し

に映った自分の姿を、他者の眼差しのもとで眺めて、そこに自分の像を発見する。堀川の顔に苦しみの表情が浮かぶと、彼女と同じような表情をしていたかつての自己像——「一人の女の姿を胸に抱きながら戦場を歩きつづけた、みじめな自分の兵隊姿」——を連想し、彼女の顔の「斑点」に気づくと、「赤い大きな円い熱帯の月」の下で呻吟していた兵士の自己像——「もっと苦しい」と自分にいいかけたせながら「五年兵の鞭の下で砲車を引いて歩いた」——を想起したのである。北山にとって、堀川は自分と同じように戦争によって苦しめられた鏡像的他者であったが、彼は彼女の表情や「斑点」を通して、容易に言語化できず自分以外の誰とも共有できない悲痛な外傷体験をよびさますのであった。彼の症状を治療するには、抑圧されている外傷体験を言語化し、ポジティブな変形や再解釈を加えていくことが必要とされる。

自分を愛してくれる理想の女性を探しながらも現実の女性を見いだせないでいる北山は、結局自我の世界に閉じこもって他者を認めようとしな。かつて自分を大切にしてくれた女性も、最初の恋人の「代理」としてしか扱わず、いつも二人の女性を比較する「冷酷な」眼差しで彼女をみていた。目の前にいる堀川には、いつも彼女を過度に理想化してとらえ、夫を失った彼女の愛を「それは夕陽の残光のように、白昼の輝きにも増して、烈しく大空の空気を焼いて消えて行く」とするのであろうか。「彼女の顔から時に放出される

ように思えるあの何処かに狂いのあるような美しさは、この愛の孤独な燃焼からでくるのだろうか」と喩えるのであった。

他者を受け入れない北山の心的態度は、彼女とともに電車を降りないシーンに象徴されている。この傾向は、同じ時期に描かれた他の小説にもみられる。それらは肉体と性欲を主要なモチーフとしているのだが、性欲を昂進させる主人公の男性は、つねに「意識し考える主体」として存在している。宮内豊氏によれば、野間の初期作品は「いづれも登場人物の『内面描写がただ主人公ひとりに限られる』ために、作中人物は「おしなべて主人公自身の知覚を通して描写されている」。その結果「自己の行為が自己にとつてではなく、相手にとつて何であるのかの視点が、完全に欠落」しており、野間の小説が「些細な現実には誇大な意味を見る一種の観念論」「一種の誇大妄想」になってしまっているとす。

この指摘のように、たしかに「暗い絵」の深見は、「俺もあいつも、どっちも、その肉体が分らないのだね」といいながら、彼女に宛てた手紙に「執着を断つ操作は強度のエネルギーを要する」「愚劣な僕を罰せよ」「大衆の苦しみの中に立つ決意を固めた」と記している。戦時体制下の学生運動というきわめて社会性の高い作品テーマとは相反するかのようによい、それが厳しい現実だったからなのかかもしれないが——、深見は相手の女性からみれば誇大な妄想を抱いているようにも感じられ、観念に内向する自我が際立っている。

る。同じように「二つの肉体」（一九四六年二月）の由木修が「彼の思想が彼女の肉体を重荷にし始め、彼女の肉体を彼の肉体から遠ざけようとしているのをこの彼女の肉体は感じ取っている……それを彼は感じる」と意識の内界に閉じこもっていることや、「肉体は濡れて」（一九四七年七月）の木原始が「以前愛していた一人の女」とらわれ、目の前の女性を受け止めようとしなれないことなど、彼は自己の性欲を押し隠そうとしない反面、妄想と観念におちいって、欲望の充足が不可能になってしまっている姿が描かれているのである。

本多秋五は、堀川の人物造型について「作者はなにか別の動機にうごかされてこの女性を描きながら、人間窮極のエゴイズムという思想のワクに、少し無理してはめ込んだのではないか」と批判した。¹⁰ それに対して木村幸雄は、北山と堀川の関係は「性的なものであるよりもむしろ人間的な〈共同苦悩〉ミットライデンにもとづくものなのである。二人は心の内に戦争のもたらした共通の〈苦しみ〉をいだいていて、その〈苦しみ〉を触れ合わせたいという心がはたらいってお互いに引かれ合う」と論及した。¹¹

戦後文学の主要なテーマの一つが《主体の確立》であったとすれば、「自分の生存のみを守っている人間が、どうして他人の生存を守る事が出来よう」と考える北山は、つねに考え続ける者として、自分を一つの全体的な主体であることを意識していたかもしれない

が、彼には他者の存在が決定的に欠如していた。他者の不在を引き起こす神経症の病因となった戦争体験につきに振り返ってみよう。

3

戦後小説としての「顔の中の赤い月」の意義は、軍隊組織に内在する暴力を兵士の眼から描き出したところにある。南方戦線に投入された北川の眼には、初年兵の敵は「自分達の前方にいる外国兵ではなく、自分達の傍にいる四年兵、五年兵、下士官、将校」であった。痩せた裸馬の手綱をとって歩く初年兵に向かって、兵長が「おめえらの代りはあっても、馬の代りはねえんだぞ」と怒鳴る。野戦で極度の緊張下におかれた兵士たちは、自分の生命を守るのがやとで仲間を気遣う余力は残されていない。

彼は戦場で自分の皮膚の中に、戦友達が刻印した冷酷な歯の跡が、いまもはっきりのこっているのを認め、それを思うと彼自身がまた戦友達の肌の中にそれと同じような歯形を残しているにちがいないと解り、戦場で生命をおびやかされた人間達が演ずる利己的な姿にぞっとするのだった。

初年兵のときから北山は「激烈な戦闘を前にして、人間はただ自分の力で自分の生命を守り、自分で自分の苦しみを癒やし、自分の手で自分の死を見とらなければならない」という事実を知らされる。本来自分は人生を否定するような人間ではないはずだと思つ一方、

中川二等兵を見殺しにしてしまったという罪悪感から、「人間否定の言葉が自分の内部から」湧き上がってくるのを抑えることができない。外傷体験となった戦場の記憶を回帰させ、アンビバレンツな感情におちいつているのであった。

作家みずからの体験をふまえて創作された「顔の中の赤い月」は、野戦という限界状況において露呈した人間の真の姿がえぐり出されている。野間は陸軍第四師団歩兵第三七連隊砲中隊の兵士として、コレヒドール要塞攻略戦に参加し、サマール島北方ニキロの地点に到着するが、一九四二年五月三日マラリヤに罹患して野戦病院に入院する。その後マニラ第九六兵站病院に移送される。八月一八日マニラ港から台南に移動するその直前、下村正夫——ブリューゲルの画集を持っていた友人——に宛てた手紙の草稿には、つぎのように記されている。

僕は、大東亜戦争を考え、支那事変が大東亜戦争に発展する筋道を考え、支那事変の段階に於て生きていた自分の規模が余りにも狭く、又余りにも偏つたものであったことを知った。僕は対米戦勃発当時の自分の戦争理解の低さを感じた。そして自分の深部で一つの抵抗を感じた。(あの激流での抵抗感である。)そして自分がそこから一歩でうるといふ感じを持つまでには、二、三日かかった。(中略)戦争の底部を考え、大東亜戦争の大東亜を考え、自分がこれまで生きてきた生活、生き方が、この

大東亜に根をとどかせていないということを考えたとき、ようやく、自分は新しい生き方を考える緒を得たのである。¹²⁾

この内容を読めば、野間はこの時点で転向を遂げていたといえるのではないか。「戦場で生命をおびやかされた人間達が演ずる利己的な姿」をとらえた「顔の中の赤い月」からは、戦場の過酷さや軍隊組織の非合理性を訴えようとするモチーフを読みとれるものの、それらが根本的な意味での非戦・非暴力主義から由来しているのか疑問に思われる。むしろ逆に、実は「諸兵心を一にし、己の任務に邁進すると共に、全軍戦捷の為欣然として没我協力の精神を発揮すべし」(「戦陣訓」という考え方を規範にしているところがあるのではないかと)の疑義が浮かぶのである。「崩解感覚」で、軍隊生活で私的制裁に苦しめられた及川は、手榴弾を使って自殺を企てた原因を、自分が「哀れな弱者の考え」しか持っていなかったからだと考えている。国家や軍隊の《法》、すなわち《象徴的な他者》に抑圧された自我は、《理想的な兵士像》から逸脱して「哀れな弱者」に転落したことを悔いているかのようである。だが、彼の身体を傷つけた手榴弾の破片と、北山と堀川を疎隔する電車の「破れた硝子窓」とは、表象できない《現実的なもの》——まさに崩解感覚と呼べるもの——が出現したことを意味していたのである。

作品の最後の場面で、北山は、中川二等兵が隊列から脱落して死んでいった光景をフラッシュバックさせている。

「ごーっという車両の響きが、北山年夫の体をゆすった。そして「俺はもう歩けん。」という魚屋の中川二等兵の音が、その響きの中から、きこえてきた。「俺はもう手を離す、手を離す。」ごーっと車両の響きが、北山年夫の体の底から起ってきた。沸騰したあついものが彼の体の底から湧き上ってきた。「離すぞ、離すぞ。」彼は中川二等兵の体が、自分のもとをはなれて死の方へつきすすんで行くのを感じた。中川二等兵の体を死の方へつきはなす自分を感じた。

「手を離す」と発話したのは中川二等兵であったはずなのだが、それが北川の心理に転移され、自分が彼を突き放したように感じている。北川にとって中川二等兵は同じ限界状況におかれた鏡像的他者——死するのは彼か我か——であって、自己の生存のために彼を見棄てたという行動は、彼を見棄てた以上、自分のその後の人生も放棄すべきであるという外傷体験になっている。野間の小説には、組織内で虐げられる日本兵は描かれるものの、その組織が攻撃目標としていた人びと——日本軍によって侵略された国外の被害者——は描かれていないし、反軍的な言論を弾圧された国内の犠牲者は後ろめたさを抱いて生きる存在——「真空地帯」(一九五二年二月)の曾田三年兵のように——としか描かれない。それは野間が戦争を否定しながらも無意識のうちに《理想的な兵士像》を前提にして兵士を描いていたからではなかったか。

野間は原隊に復帰して事務室書記を務めていた間、治安維持法違反の容疑で陸軍憲兵隊によって逮捕された。内務省警保局保安課「特高月報」（昭和一八年六月分）の「共産主義運動の状況」のなかに羽山善治と矢野笹雄の取り調べ状況が記載されている。野間は（一）一九三五年頃京都帝大文学部在学時に小野義彦たちとともに左翼文化グループを組織して学内活動をおこなった、（二）卒業後も同グループを解散せず人民戦線運動における文化運動の理論的研究をおこなった、（三）一九四〇年一〇月初旬羽山・矢野を日本建設協会に紹介し、山本鶴男たちに合流し左翼グループの拡大に寄与した、（四）一九四一年下旬野間・羽山・矢野は、従来の左翼文化運動を批判するとともに、弾圧の危険を鑑みて外部組織との連絡を避け、各自職場を利用して個別的分散的活動を進めることを協議した。これら四点が「活動の概況」として具体的に列挙されている。

日本建設協会は、日本国体研究所から分裂して創設されたファシズム団体であったが、その実態は転向者集団であった。「一方では独逸に於けるナチスの成功を回想し他方ではマルキシズムの組織論を振り廻して」いた。「日建の態度は客観情勢に左右され、或はマルクス主義的面を露出し又情勢に依つてはファシズムの態度を強化した」のである。細谷松太・江森守彌・井汲卓一たちは、ファシ

ズム組織に潜入して反ファシズムの思想を広める人民戦線運動を画策し、「官僚の持つ進歩性、軍部の持つ進歩性、右翼団体の持つ進歩性を見逃してはならぬ」とする風早八十二の指導を受けて、それらの「進歩性と協同すると云ふ戦術が現段階に於て成立しなければならぬ」と提言した、まさに『第三の途』の活動を展開したのであった（「特高月報」昭和一七年三月分）。野間が日本建設協会や、行政主導の融和運動であった浪速区経済更生会に協力したことなどが中村福治氏から批判されたが、野間の行動は基本的に、戦時体制下における限定された左翼運動の活動方針であった人民戦線運動に沿ったものであったといえる。

「暗い絵」のなかに深見の「転向して出獄」した過去が触れられているが、野間はみずからの転向体験を積極的に描き出してはいない。だが、手帳には「わが身を忘れる勿れ、昭和十八・十一・十六日を忘れる勿れ。この日を忘れることは、お前が、自己の全身を忘れることであり、自己の中の、隠された力を、忘れ去ることである」と記されている（一九四四年五月二三日）¹¹。この日に転向を表明した野間は、懲役四年執行猶予五年の刑が確定し、陸軍刑務所を出所して原隊復帰したのが二月二八日のことであった。刑事裁判の手続き上は四三年一月一六日に転向がおこなわれたとされるが、心的現実としては四二年八月マニラ第九六兵站病院ですでに転向をおこなっていたと考えられるのである。

野間の手帳には、右の前後に「野戦に行くことによって、自分の道も、少しはひらけるかも知れない」（五月九日）、「戦闘によって鍛えられる自己を改めて思ってみる。再度の戦闘の経験によって、自分が、どの辺りまで伸長しうるかどうかを考えてみる」（五月一〇日）、「野戦にいる自分を考えるとき、自分はもっと自由に手足をのばし得たであろうという気がする」（五月一二日）、「戦闘の中に自分の身を立てるとき、はじめて、自分は、生きるであろう。自分の身を、もう一度、戦火の中に立たす必要がある」（六月二六日）と記されている。¹⁵それが外傷体験になっていたにもかかわらず、野戦での戦闘に再び参加したいとする野間はアンビバレンツな死の欲動、すなわち有機体の自然な限界をこえて死の彼岸においてさえ生き続けようとする反復強迫の衝動にとらわれていた。

梯と野間は、いずれも思想犯として治安維持法違反の容疑で逮捕され、転向を表明した。梯は京都府警特高課によって検挙され、民間法廷での公判中に予審判事に転向上申書を提出した。野間は兵役に就いてから陸軍憲兵隊によって検挙され、軍法会議に付され法務官に転向を告げた。この違いは大きく、審理が非公開とされ、下士官や兵士には厳しい判決が出されることが多かった軍事法廷での審問に加えて、陸軍刑務所の独居房による精神的苦痛は、野間にとって測り知れぬほど深刻なものであったと推定される。さらに兵役の期間が、梯は河南省鄭城での俘虜生活を含めて約一〇カ月であった

のに比して、野間は南方戦線での戦闘や軍法会議の期間を含めて約三年間に及んだことも、野間の眼には、国家軍が掲げる《法》の権威が峻厳なものとして映った原因になっていたのである。

「部隊全体が餓えているとき、自分の食糧を他人に与えることは自分の死を意味した」という生存闘争において、北山は中川二等兵を見殺しにした自己の行動に罪悪感を抱いている。しかし同時にそれは「戦友の道義は、大義の下死生相結び、互に信頼の至情を致し、常に切磋琢磨し、緩急相救ひ、非違相戒めて、俱に軍人の本分を完うするに在り」（『戦陣訓』）という〈理想的な兵士像〉から逸脱したことに對する罪悪感でもあった。「戦場で生命をおびやかされた人間達が演ずる利己的な姿」は、戦場でのみ現れるのか、あるいは日常生活でも現れるものなのか。その答えは、内務班という軍隊生活の日常を描いた「真空地帯」のなかで示されることになるのだが、「真空地帯」のさらに重要なテーマは、組織の規範を支えている〈象徴的なもの〉の構造をとらえようとしているところにある。

治安維持法の影におびえ、上官のさまざまな欲望を引き受けている曾田三年兵に比して、陸軍刑務所に二年間服役し、もはや〈理想的な兵士像〉に同一化する可能性が残されていない木谷一等兵は、《法》をめぐる暴力を体現している。彼は師団經理室将校の権力闘争に巻き込まれ、冤罪ともいえる罪状で師団司令部軍法会議に付されたのだが、《法》の権威を前にしては何一つ抵抗できなかった。

その後、自分を「監獄がえり」と嘲笑した上等兵を打ちのめし、すべての班員を整列させて、木谷が「監獄がえりのバッチ」と呼んだ凄まじいビンタを喰らわせる。だが実は、木谷は一等兵であったものの班内で最古参の四年兵であったことから、ビンタは、内務班では彼に許された行動であったのである。

一九四一年一月陸軍省は陸軍次官名で「私的制裁絶滅ニ關スル件通牒（陸密第三七七六号）」を發出し、私的制裁が「軍隊ノ團結ヲ破壞シ対上官犯或ハ逃亡離隊等ノ重ナル動機ヲ醸成シ又軍民離間ノ素因トナルコトニ關シテハ敢ヘテ贅言要セザル所」のものとして、その根絶が指示されていた。軍紀によって禁止されていたにもかかわらず、私的制裁が黙認されていたのは、戦闘態勢が解除された状態で日常生活を送っている内務班の規律を維持させるのに不可欠なものともみなされていたからである。軍紀という《象徴的なもの》の内部におかれながら、初年兵に対して執拗にふるわれる非合理的な暴力として、私的制裁は、象徴化不能な《現実的なもの》の核になって現れる。暴力のふるわれる対象が組織の内部であれ外部であれ、軍紀さえ止めることのできない暴力を、いつでも行使できるのだと脅迫することによって、自分たちが所屬している部隊が制御不能な暴力装置であることを誇示している。野間が「木谷の手は真空地帯をうちこわす」と描いたが、「木谷の手」は「象徴的なもの」の中心にある現実的——外傷的な場」を明るみにし、内務班における私的

制裁がすべての兵士に外傷体験を刻印していた構造を描き出したのである。¹⁶⁾

5

野間は「日本の最も深い場所」（『文藝春秋』第二七卷第二七号、一九四九年七月）のなかで、「人間の個性性」「肉体の個性性」の問題を「顔の中の赤い月」に描き出したと語った。戦友を見殺しにしたことを想い出して苦悩する主人公を救済できるものは、宗教以外にはないと思われていた。ところが「この解決の緒」を「最近の日本の人民闘争」に見出し「共産党の細胞以外にこの問題の解決点はない」と考えるようになったというのである。

「自己意識からの脱出」を課題にしていた野間が地域人民闘争に触れたのは、一九四八年一月のことであった。四七年の二・一全国統一ストをGHQによって禁止された労働組合は、翌年にかけて職場闘争を基礎に地域人民の諸要求と結合し、地方権力との闘いを目指した。地域人民闘争と産業復興闘争は、四七年二月二日の日本共産党第六回党大会において定式化された新しい運動方針であった。このとき日本共産党は、それまで掲げていた「平和革命」を「革命の平和的發展」へと修正して「民族独立闘争」を重視するようになった。社共合同を視野に入れながら労働組合の闘争に地域の課題を取り込んで政治的共闘体制を確立しようとしていたのであ

る。

野間によれば、宗教に存していた「大きな愛」が現代の社会において成立する根元になるのは「共産党の細胞」である。「細胞に於てはじめてひとは、互に他を欠くことのできない人間として認めることが実的に可能となる」という。このとき野間において、軍紀という《法》によって統制化された兵士と国家の関係が、党紀という《法》によって規律化された細胞と党との関係へと転換されたのである。

本多秋五によれば、野間が文京区委員会の地区委員として地域人民闘争に傾倒していったのは、「宗教的回心」としか理解できないような現象であった。浄土真宗の一派の教祖であった父親を持ち、少年時代からその後継者を自負していた宗教的素質などが「彼に独特な救世者の使命感」を与えていたとする。⁵²世の人びとを救おうとする人間は、《象徴的な他者》から自分の行動を正当化してもらって「愛」の根拠を与えられ、新しい主体を手に入れるのである。

しかし、野間は一九六四年一〇月日本共産党を除名される。野間を含む党文化人グループ一二名が志賀義雄・鈴木市蔵の除名に関して党指導部の偏向と官僚的な指導を強く批判し、現在の基本政策の再検討を求める要請書を提出したのがきっかけであった。入党以来の党活動と除名の経緯を語った臼井吉見との対談「日本共産党の中の二十年」（『展望』第七六号、一九六五年四月）のなかで、野間は「コ

ミュニズムの「往生要集」を創作する決意を述べる。「ぼくは日本の党のなかでまたその活動をすすめるなかで見とけてきた悪行の一切、これに向かいあって、これをさらによく見、これを分類しこれを集大成する。そして党と日本人との関係を明らかにして、そのなかで戦争から戦後にかけての、日本人の悪行すべてを見とどけ、それを分類しそれを集大成する」と宣言した。

野間は「極悪者であり、愚者であって、そして日本文学を根底から変革する力と可能性を持っているもの」と自己規定する。しかし、〈弥陀一仏〉という一宗教的要素を持つ浄土真宗の「極悪者」「愚者」という人間像には、軍紀という《法》の下におかれた兵士たちの「哀れな弱者」のイメージに通じるものがある。「スターリン時代の訴訟における告白はなぜ起きたのか」という疑問に答えようとしたスラヴォイ・ジジエクによれば、「裏切りを訴追された共産主義者」が「言表行為の主体の水準」において「真の共産主義者である」と自ら主張する唯一の方法」は「私は告白する、私は裏切り者である」と表明すること以外にはなかったという。⁵³野間は「党のなかでまたその活動をすすめるなかで」見つけた「悪行」をすべて明るみにして整理すると語ったが、そこに「善行」が存在した可能性を否定したわけではない。むしろ善があるはずだと信じているからこそ悪をえぐり出そうとするのである。すなわちこのとき野間はコミュニティの《法》の権威自体を疑ってはいないのである。「新日本文学」

派と「近代文学」派、あるいは「新日本文学」派と「人民文学」派との論争からも明らかなように、戦後知識人にとって、党はもはやコミユニズムを標榜する唯一絶対の組織ではなく、党とコミユニズムとの分裂が《象徴的なもの》の境位において生じていた。その結果コミユニズムの《法》を受け入れる者は、民主主義作家を名乗ることが許され、たとえ党から除名されたとしても、民主主義作家の身分証明書が発行されるという事態が生じていたのである。

注 「暗い絵」「顔の中の赤い月」「崩壊感覚」の本文は『野間宏全集』第一卷

(二) 一九六九年一〇月、筑摩書房に拠った。

(1) 梯明秀「告白の書―時局の精神的断層」(『展望』第四一号、一九四九年五月、五頁)

(2) 同右

(3) 同右

(4) 風早八十二『労働の理論と政策』(一九三八年一〇月、時論社、一頁)

(5) 前掲(1)と同じ。

(6) ブルース・フィンク『ラカン派精神分析入門―理論と技法』(中西之信他訳、二〇〇八年六月、誠信書房、一六八、一七八頁)

(7) 同右、一七八、一八〇頁。

(8) 同右、一八六、七六頁。

(9) 宮内豊「自己執着の文学―初期野間宏の問題」(『群像』第三卷第九号、一九六七年九月、二二四、一三三頁)

(10) 本多秋五「もみ抜かれた野間宏」(『物語戦後文学史』、一九六〇年一月、新潮社)、引用は同書(一九六六年三月、新潮社、一三三頁)からおこなった。

(11) 木村幸雄「顔の中の赤い月」について(『福島大学教育学部論集人文科学』第二卷第二号、一九六九年一月、三三頁)

(12) 野間宏『作家の戦中日記 一九三二―四五』下(二〇〇一年六月、藤原書店、八四五頁)

(13) 中村福治『戦時下抵抗運動と『青年の環』』(一九八六年一〇月、部落問題研究所、七四―七七頁) 参照

(14) 前掲(12)、八七七頁。

(15) 前掲(12)、八七六頁。

(16) スラヴォイ・ジジェク『もっとも崇高なヒステリー者―ラカンと読むヘーゲル』(鈴木國文他訳、二〇一六年三月、みすず書房)によれば、アンティゴネーの場合、「象徴的共同体からの排斥」による死が「現実的な死」に

先立って起きていることに触れ、「二つの死の間」のこのズレの場が「もの(Das Ding)の場、欲望の原因―対象の場、象徴的なものを中心にする現実的―外傷的な核の場」であると指摘している(二六五頁)。

(17) 本多秋五「人民闘争」と『回心』(前掲(10)と同書、六二四頁)

(18) 前掲(16)、二四〇―二四二頁。

―おにし・やすみつ、三重大学理事・副学長―